

岬一郎の抵抗 (二)

半村 良



岬一郎の抵抗(二)

半村 良

講談社

みさきいちろう ていこう
岬一郎の抵抗 (二)

はんむら. りょう
半村 良

© Ryo Hanmura 1991



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1991年8月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-184966-2

岬一郎の抵抗(二)

半村 良

講談社

目次

不能犯

七

現代の聖者

七三

対立者

一四二

常識

一八九

対策

二四三

密使

二〇七

岬
一
郎
の
抵
抗
(二)

不能犯

1

電話が鳴ったとき、野口は眠りかけていた。彼は慌てて起き上がったが、立つとき敷いていた座布団に足をとられてちよつとよろめいた。

「もしもし」

「帰ったのね。どこへ行つたのよ」

昌代の声にはたつぷりと刺さが含まれていた。

「今日は大変だったんだ。都庁でまた人が二人も死ぬし、帰れば帰ったで飛んでもない大事件が起こるしな」

「うちの仕事に関係があることなの……」

「いや、そうじゃないが」

「町会のことなんかは首をつっこむからよ。あたしたちにはなんの関係もないじゃないの。お得

意さんから電話がたくさんかかってたわ」

「すまん。あした詫^わびておく」

「チロが死んじやったのよ」

「え……」

「あの毒ガス騒ぎのせいだわ。ひどい咳^{せき}がやまなくて、とても苦しそうだった。かわいそうで見
ていられなかったわ。菊川の獣医さんを教わって連れて行ったんだけど、間に合わなかった。あ
たしの目の前で苦しみなから死んだわ」

「すまん、辛^{つら}かっただろう。いまだここにいる」

「鳥居坂の慶子のマンション。慶子にペットの葬儀屋さんを教えてもらって、チロのお墓を手配
したの。ちよっと待って、慶子とかわるから」

電話の声がすぐに変わる。

「もしもし……」

あまつたるい声だ。

「お久しぶり。すぐくまじめにやってるんですってね。昌代ちゃん、所帯臭くなっちゃうわよ。
犬が死んだからだけじゃなくて、彼女だ**い**ぶ参^{まゐ}ってるみたい。ちよいちよい息抜きをさせてあげ
なきゃ、ノイローゼになっちゃうわよ」

その声は野口に同情しているようでもあり、遊びに誘っているようでもあった。

「きょうはあたしもお店を休んじやう。昌代ちゃんが久し振りに来てくれたんだもの。心配しな

いでね。ちゃんとその部屋へ連れて帰るから。盛大に遊びましようって、いま相談がまとまったところ。いくら可愛がってた犬でも、しんみりお通夜をするなんて、かえっておかしいじゃない。あたしにまかしといて」

「すまん。君にはなにかと世話をかける。ちよつとかわつてくれ」

「何があつたかしらないけど、仕事もあたしも放り出してかけずりまわるなんて、最初の約束とは違ふじゃない。もう町会のことなんかに関わらないでよ。それじゃなくなつて貧乏所帯のやりくりで精一杯なんですからね。あたしの味方はチロだけだったのよ」

「判つたよ。いつ帰るんだ」

「判んない。あしたのお昼ごろには帰るつもりだけど」

慶子や昌代の顔の広さを知っている野口は、彼女たちがその氣になつて遊び回れば、帰宅は早くても午前三時か四時になるだろうと察し、昌代のフラストレーション解消には、それもいいだろうと思つた。

昌代が帰つて来ないのなら、ひとりで食事をしなければならぬ。電話をおえた野口はキッチンの方を見て、どうしようかと考えた。炊飯器に飯はあるはずだ。急に食欲が出て来た。

そこへまた電話。

「はい、野口です」

「俺だ」

高田の声だった。

「遅かったな。ずっと連絡を待っていたんだ」

「あしたの新聞やテレビを見ろよ。大騒ぎが始まるぞ」

「すぐ会う必要がある」

「ほう、また何か起こったか。今度はなんだ。また誰か死んだか」

「そんな問題じゃない。会って話さなければお前だって信用しないだろう」

「行くよ。いまそっちへ向かおうとしていたんだ」

「飯は……」

「一応な。テレビ局で軽く食った。お前は……」

「チロが死んだ。昌代は友達のところへ行って今日は帰らない」

「いま神保町にいる。権兵衛ずしへ寄って寿司と何か酒の肴さかなを持って行こう」

「早く来い。待ってる」

野口はほっと気の休まるものを感じながら電話を切る。昌代はペットが死んでショックを受けているようだが、慶子という昔の仲間のところへ行ったのは、それをきっかけに日頃の不満が噴き出したせいだ。今夜は銀座の人気者の昔に戻って、思い切り羽根をのばすことだろう。

だが、この部屋へ帰って来たとき、彼女は果たして岬一郎という存在に、どれほどの理解を示してくれるだろうか。野口と昌代は客とホステスの関係で恋をし、野口の思い切った退社をしょに、昌代がホステスをやめ、妻として野口の新生活について来ることになったのだ。

そこにはたしかに愛情があった。一介の町の印刷屋の女房になることを決断してくれた昌代

に、野口は深く感謝していた。

だが、ペットの死と超能力者の出現と、彼女はどちらを重要視するだろうか。……野口には既に岬一郎に対し、自分がすべてをなげうつてのめりこんで行きそうな予感があった。昌代はそれでも自分について来るだろうか。

ほそぼそとはあるが、今日まで築いてきた昌代との生活が、岬一郎の出現で崩壊してしまいそうな気がしてならない。だが野口は高揚した気分でその予感を受け止めている。この問題の前には、私的なことは秤^{はかり}にかけるほどの値打ちもないという、強気な心理が野口を支配しているのだ。しかし、昌代は野口に対して、傍観者であれと要求しそうだ。新人類の登場とか、現人類への救済とかということは理解せず、野口が新興宗教に凝ってしまったような解釈で、慶子あたりに愚痴をいう毎日になりはしないだろうか。

出来たら昌代を岬一郎に会わせたい。彼の持つ奇跡的な力を見せて納得させる必要がある。

高田が来た。

「どうした。何が起こったんだ」

高田は靴を脱ぎながらそういい、いつもの鞆^{かばん}と紙袋を持って茶の間へ入った。野口はキッチンにいて、

「コーヒーかお茶か」
と訊いた。

「寿司だよ。お茶さ。だが、まず酒だな」

「そこにブランデーがある。それでいいか」

「氷、水、グラス、それに皿と醬油。箸は権兵衛のがある。そうだ、刺し身だから酒か焼酎がいいな」

「いまポットのお湯をとりかえるところだ。それじゃ焼酎にするぞ。このあと仕事は……」

「一応すませた。あすの昼ころまで置いてもらうぞ」

「ああ、そのほうが俺も都合がいい。話は長くなりそうだ」

「気を持たせるなよ。あのあと何があったんだ」

「岬一郎は超能力者だった」

「岬一郎……」

「目立たないおとなしそうな人がいたろう」

「彼か。気になる男だったな」

「前の金沢課長も今度の二人も、あの岬一郎のせいで死んだんだ。あのとき俺たちは、義憤が人を殺すのかも知れないと思ったじゃないか」

野口はポットをさげて茶の間のテーブルの上へ置いた。

「あのときたしかに冷たい風が吹いたな。なにか超自然的なものを感じたよ。俺はあれから松川三丁目の陳情の応対に出た三人の連続死亡事件を各社にとりあげさせようと飛び回っていたんだ」

「乗って来たか……」

野口はそう尋ねながらキッチンへ戻る。

「ああ、そりや乗るよ。三人の連続死亡事件で、しかもまだ松川三丁目のこの間の避難騒ぎをフオローする態勢を組んでいたところもあるしな」

高田は紙袋から寿司や刺し身の包みを取りだしてガサガサと開いていた。

「連続死亡事件プラスあの避難騒ぎ、プラス極秘の化学物質。昔懐かしい津田島美麗堂と津田島博士の画期的な農薬。その研究や製造過程に生じる公害の危険性。……週刊誌はどこも飛びついたね。彼らが取材の動きを見せただけで、新聞各社が動揺した。一部では以前から握っていたネタだ。扱いかたはどうでも、あすの紙面には必ず全社載せて来るはずだ。環境整備局の連続死亡事件がその露払いというかたちさ。もうどこも隠しちゃおけんだろう」

野口は皿や醬油を揃えて茶の間に坐り、焼酎をグラスについだ。申し訳程度にお湯で割る。

「お前は岬一郎についてまだ何も知らない。津田島博士の研究なんか吹っ飛ぶぞ」

高田はにやりとしながら野口を見た。

「超能力のおまけつきか。そりや派手になるな」

「お前なら判ってくれる。俺は新しい人類の誕生だと思うんだよ」

野口は絶るような目で高田をみつめた。

「とにかく聞こう」

高田は野口が真剣なのをみて、態度を改めた。

「俺たちは帰って来ても解散せず、町会事務所に集まった。そこでの話は堂々廻りみたいなもので、どうと言うことはなかった。お前、あの町内に足の悪い子供を車椅子に乗せて歩いている奥さんがいるのを知ってるか」

「ああ、何度か見かけたことがある。一緒に水道ビルへ来てたじゃないか」

「彼女はその子がいるんですぐ家へ戻り、いつものように坊やを車椅子に乗せて外へ出たんだ。するとあの岬一郎が出てきて車椅子をとめ、坊やの膝ひざに手を当てて、坊やはもう歩けるよと言ったんだ」

「おい、まさか歩けたというんじゃないだろうな」

「歩けるようになったんだ。その場ですぐにな」

高田は野口を睨にらんだ。長い付き合いだ。高田は野口の言葉を信じるべきだと思ったようだ。

「その奥さんは阿部というんだが、その阿部夫人が町会へ坊やを抱えて飛び込んで来た。岬さんが坊やの足を治してくれたと知らせに来たんだ。泣いていたよ。町会事務所の床に手について、誰だれ彼かれなしに礼を言い続けた」

「お前は信じたのか」

「本当ならキリストの再来だと思った」

「キリストが三人も睨み殺すかよ」

高田は不機嫌な顔で言う。

「みんな興奮して、岬一郎のいるアパートへ押しかけたんだが、岬一郎がアパートの前へ出て来